

1934年田川基二博士により、当時の花蓮港庁 (inter Tobita et Mihara) で採集され、*S. himalaicus* のカバー中に収められていたものは、本種であることを知った。中村助教授にしらべてもらったところでは、台湾各地に広く分布する *S. himalaicus* と異なり、*S. Sigeyosii* は花蓮附近の比較的狭い地域に分布するもののようである。

終りに *S. Sigeyosii* の基準標本その他を調査してもらった中村助教授と、腊葉標本の閲覧や文献について援助を受けた、東京大学総合研究資料館植物部門の大場秀章氏に謝意を表する。

(東京農業大学、伊豆大島ハワイ植物園)

○オオバヤシャゼンマイの減数分裂における染色体接合について (志村義雄・松本 定): Yoshio SHIMURA・Sadamu MATSUMOTO: On the chromosomal association in meiosis of *Osmunda* × *intermedia*

オオバヤシャゼンマイ (*Osmunda* × *intermedia* Sugimoto) の染色体数に関して、栗田 (1963) は $n=22$ を報告され、また辰野・吉田 (1966) は $2n=44$ を示し、核型分析を行ない、このうちの3対の染色体はヤシャゼンマイとゼンマイの各染色体が部分的に組み合わせられ、このシダの雑種性を示唆していることを報告された。志村 (1964a, 1964b, 1972) はこのシダの胞子葉の形質、胞子の形態及び発芽率並びに生態 (三者の住み分け) などの観点から、この雑種性を推定した。

今回筆者等はこのシダの減数分裂を再検討した。1977年3月下旬、志村宅に十数年来植栽しておいた1株のオオバヤシャゼンマイ (富士市三度蒔産) から出芽した、ほとんど地上すれすれ状態の胞子囊穂を採集し、綿毛を除いて、カルノア液で固定し、通常の酢酸カーミン押しつぶし法で観察試料を得た。減数第一分裂中期像を377核板観察し、次の結果を得た。() 内に出現頻度を示すと 22_{II} (36.6%), $21_{II}+2_I$ (3.2%), $1_{IV}+20_{II}$ (31.0%, 図 1-A), $1_{IV}+19_{II}+2_I$ (2.4%, 図 1-B), $2_{IV}+18_{II}$ (15.9%, 図 1-C), $2_{IV}+17_{II}+2_I$ (1.3%, 図 1-D), その他 (9.6%) となり、この結果は栗田と辰野・吉田の相反すると思える結果を包含しうるものであった。このうち四個染色体が2個形成される核板が17% とかなり多く、このことと辰野・吉田の核型分析の結果 (22対のうち3対のヘテロ核型を示した) を合せ考えると、オオバヤシャゼンマイは明らかに構造雑種であり、特に今回の観察から少くとも4対のヘテロ核型を持つことが推定される。またこのことはゼンマイとヤシャゼンマイ間の種分化の際に二回の相互転座を起したことが示唆されよう。

引用文献

- Kurita, S., 1963. J. Coll. Arts. Sci. Chiba Univ. 4: 43. 志村義雄, 1964a. 日本生態学会誌. 14: 147-153. —, 1964b. 植研. 39(8): 242-246. —,

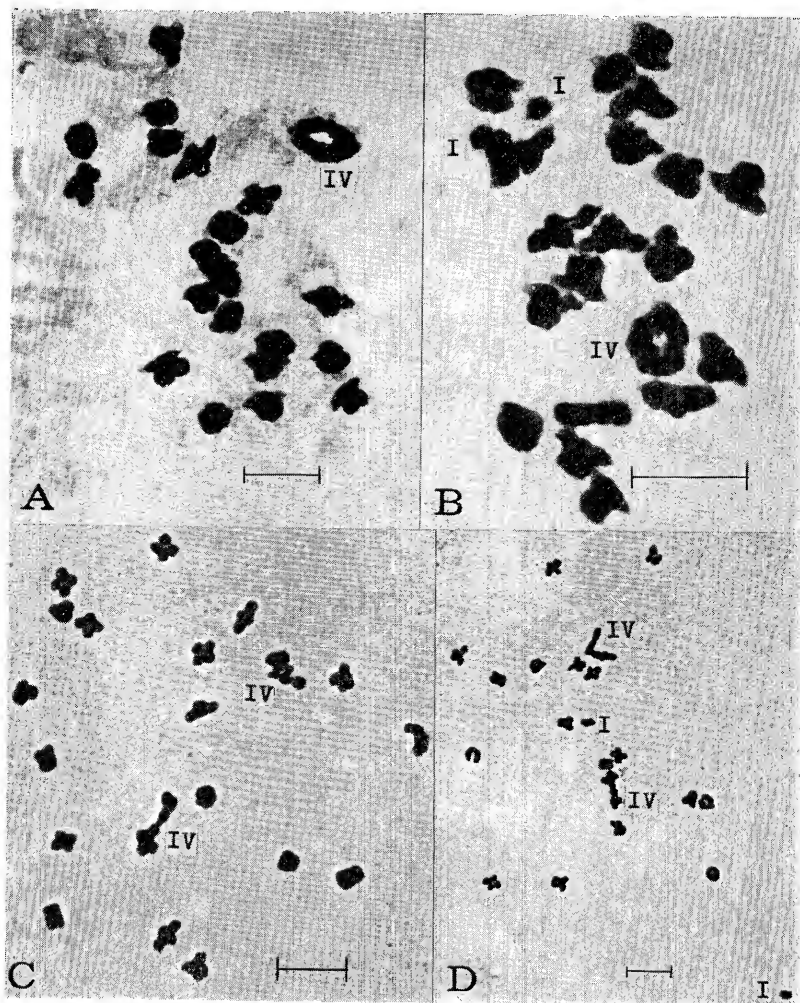


図 1. オオパヤシャゼンマイ (ゼンマイ×ヤシャゼンマイ) の減数分裂における染色体接合。(A: $1IV+20II$, B: $1IV+19II+2I$, C: $2IV+18II$, D: $2IV+17II+2I$). 目盛: 10μ .

1972. 北陸の植物. 20(2): 38-42. Tatuno, S. & Yoshida, H., 1966. Bot. Mag. Tokyo 79: 244-252.

(志村義雄: 静岡市大岩 2-20-11 〒420, 松本 定: 静岡大学教育学部生物学教室. 静岡市大谷 836 〒422)